

【メッセージ】

大橋洋一教授のご退職に寄せて

大橋先生、ご退職おめでとうございます。先生は2007年の現代文芸論研究室発足当初より、協力教員として研究室の教育活動に多大なご尽力をなさいました。研究室開講の授業を毎年ご担当くださり、また文化理論や英文学を専攻する学部生・院生の直接の指導にもあたられました。

私は学部生時代から先生の文学理論についての授業に出席していましたが、ときにブラックな、ユーモア溢れる語り口に笑いが次々と起こり、時間があっという間に過ぎてしまう授業は、毎週の楽しみでした。大橋先生と個人的にお話をする機会に恵まれたのは、現代文芸論研究室発足の一年前でした。当時スラヴ後スラヴ文学研究室の修士課程だった私が、西洋近代文学研究室のホームページに掲載するために、大橋洋一編『現代批評理論のすべて』（新書館、2006年）についてのインタビューをさせていただいたときでした。難解な理論、非常に広範な知識、鋭い批判精神を総動員する分析スタイルから、先生へのインタビューは大役に思え、たいへん緊張したのを覚えています。でも実際にインタビューしてみると、私の緊張を汲み取ってくださったのが、授業のときよりもずいぶん柔和にお話くださり、肩を撫でおろしました。

私が博士課程のときには、授業の他にも、ジュディス・バトラー『ジェンダー・トラブル』や、先生の翻訳されたフレドリック・ジェイムソン『政治的無意識』の読書会で、より近い距離でご意見を伺う機会に恵まれました。また先生との交流は大学の外へも広がり、数人で映画館へ行き、その映画について話し合うという会にもよく参加させていただきました。私はもともとスラヴ語圏を専門にしている、博士論文ではユーゴスラヴィアとソ連を研究対象にしていたため、それまで研究関係の知り合いといえばスラヴ語圏を研究対象とする人たちがほとんどでした。しかし、大橋先生にお世話になるうちに、大橋先生を通じて現代文化理論や英文学を専門にする研究者のみなさんとも親しくなり、自分にもできるのではないかと、これまであまり縁がないと思っていたアメリカをソ連の比較対象として考えるというテーマに変えました。今となってはアメリカに住んでいるほどです。地域・言語ごとの縦割りをなくそうという主旨に惹かれて、現代文芸論研究室を選んだわけですが、大橋先生との出会いは、水面に投じられた石が描きだす波紋のように私の想定を揺るがし、いつの間にか、思ってもみなかった場所へと導かれていったように感じています。

私が現代文芸論研究室の助教をしていたときには、学位論文審査へのご出席をお伺いするたびに、（ときにかかなりの割合を占めることもあった）英米文学をテーマとする論文の審査をご快諾くださっていたのが印象的です。先生が専任教員として所属されていた英語英米文学研究室での論文審査と同じ時期ですから、単純に考えても通常の二倍の量の論

文を毎年読まれていたことになります。そして審査時には先生独特のユーモアと鋭きをまじえたコメントを聞くのが密かな楽しみでもありました。先生のコメントはときに、書いた本人すら意識していないような細部から大きな問題を浮かび上がらせるものでした。だけれが書いたものであっても、とにかく精読するという姿勢を教えていただきました。

このことは、先生の研究領域の信じられないような広範さとも無関係ではないでしょう。シェイクスピア研究者でありながら最新の欧米文化理論を広める中心であり続け、ジェンダー理論やポストコロニアル理論を日本にもたらしたことは特に有名ですが、アダプテーション理論、エコクリティシズム、そして近年ではアニマル・スタディーズにも取り組まれています。理論が異なれば精読の対象も異なりますが、先生は、文学は古典から現代まで、また映画やその他の大衆文化にも精通されていて、私はいつも自分の無知を恥じ入るとともに、その無差別とも言える知的関心の広さはどこから来るだろうかと驚嘆していました。先生と学内外でお話しをする機会が増えるうちに、相手がだれであっても一人一人の話をじっくりと聞いてくださること、一人一人の細かいことまで、こっちがびっくりするくらいに記憶されていることを知りました。そして、先生の「無差別的な関心」も、人のことを思うという根源的なところからきているのではないかと思うようになりました。

シェイクスピア作品も当時のイギリスでは大衆文化だったことに鑑みれば、先生のご研究は、難解そうに見えても実は、人々の考え方、感じ方、生き方を知ろうというシンプルな関心から発しているのではないかと思えてきます。その恩恵に預かるかたちで、思い返せば私のつまらない話もずいぶん聞いていただきました。これまでのご指導に、心より感謝申し上げます。お世話になりました、本当にありがとうございました。

末筆になりますが、先生のますますのご健康とご活躍をお祈り申し上げます。

亀田 真澄